

生命倫理の諸問題

内容

1. 生命倫理が対象とする問題領域
2. 人工授精・体外受精
3. 人工妊娠中絶
4. 出生前診断
5. 遺伝子診断、クローニング
6. 安楽死・尊厳死
7. 脳死・臓器移植
8. 生命倫理をめぐる課題と展望

1. 生命倫理が対象とする問題領域

- 生命倫理の成立過程
 - 伝統的な「医の倫理」と生命倫理の違い
- 生命と宗教の関係
 - 多くの宗教にとって、身体的な癒しと宗教的な救済は不可分の関係にあった。
- 近代化に伴う二極分化
 - 身体(政治・科学)と精神(宗教)

生殖・出産をめぐる苦悩 —聖書の事例から

- 「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」(創1:28)
- サラ(創17:15-19, 21:1-2)
- ラケル(創30:1-2, 22-23)★
- ハンナ(サム上1:5, 19-20)
- エリサベト(ルカ1:24-25)
- マリア(マタ1:18-25、ルカ1:26-38)

不妊の苦しみ—ラケルの場合

ラケルは、ヤコブとの間に子供ができないことが分かると、姉をねたむようになり、ヤコブに向かって、「わたしにもぜひ子供を与えてください。与えてくださらなければ、わたしは死にます」と言った。ヤコブは激しく怒って、言った。「わたしが神に代われると言うのか。お前の胎に子供を宿らせないのは神御自身なのだ。」ラケルは、「わたしの召し使いのビルハがいます。彼女のところに入ってください。彼女が子供を産み、わたしがその子を膝の上に迎えれば、彼女によってわたしも子供を持つことができます」と言った。ラケルはヤコブに召し使いビルハを側女として与えたので、ヤコブは、彼女のところに入った。(創30:1-4)

しかし、神はラケルも御心に留め、彼女の願いを聞き入れその胎を開かれたので、ラケルは身ごもって男の子を産んだ。そのときラケルは、「神がわたしの恥をすすいでくださった」と言った。彼女は、「主がわたしにもう一人男の子を加えてくださいますように(ヨセフ)」と願っていたので、その子をヨセフと名付けた。(創30:22-24)

宗教的領域と技術的領域



7

神義論的問いかけ

- 「神義論」(**theodicy**)
 - なぜ神は悪や不幸から救い出してくれないのか？
 - 神が善であるなら、なぜ、この世に悪や苦しみが存在するのか。

8

2. 人工授精・体外受精

人工授精・体外受精の現状

- カリフォルニア精子バンク
 - <http://www.thespermbankofca.org/>
- IVF大阪クリニック（不妊治療専門病院）
 - <http://ivfosaka.com/>

10

不妊治療の背景

- 人工授精は不妊治療のための、もっとも古くからある技術。
- 不妊治療として始まった体外受精は、クローン技術や遺伝子診断などの基礎技術を提供することになった。
- 不妊夫婦の増加
 - 出産を望む夫婦の**5～10**パーセントが不妊。
 - 人工化学物質の影響。

11

人工授精 (Artificial Insemination)

- **18**世紀末、スコットランドのジョン・ハンターによるものが最初と言われている。
- 人工授精の種類
 - 配偶者間人工授精 (**AIH=AI by Husband**)
 - 非配偶者間人工授精 (**AID=AI by Donor**)
- 人工授精は、その技術を比較的容易に利用できる。

12

体外受精 (In Vitro Fertilization)

- 精子と卵子を体外で受精させた後に、子宮内に戻す(胚移植)。
- **1978年**、最初の体外受精児ルイズ・ブラウンがイギリスで誕生。
- **1回**の体外受精で出産にまで至る確率は、**10～15パーセント**。



体外受精に対するノーベル賞 とその背景・影響

- **2010年**、体外受精技術を開発したロバート・エドワーズ氏が、ノーベル医学生理学賞を受賞。
- これまでに約**400万人**の体外受精児が誕生。
- 体外受精は世界の約**10%**のカップルに影響を与えている。
- パチカンは、受賞に対し、すぐに批判。

14

代理母 (Surrogate Mother)

- 夫以外の精子、妻以外の第三者の子宮(代理母)、卵子を使った出産が可能。
- 3種類の母の出現。
 1. 卵子を提供する遺伝子上の母
 2. 子どもを懐胎する母(代理母)
 3. 誕生した子どもを育てる社会上の母
- 子どもをめぐる母の争い
 - **1986年**、ベビーM事件
- アメリカ代理母センター
 - <http://www.surrogacy.com/>

15

人工授精・体外受精に対する多様な評価

【肯定的立場】

1. 自然を制御すべきという視点から
2. フェミニストの視点から

【否定的立場】

1. 宗教的視点から
 - i. ローマ・カトリック
 - ii. プロテスタント
2. フェミニストの視点から

【肯定】自然を制御すべきという視点から

- ジョセフ・フレッチャー
 - 生殖技術の利用はより人間的な行為。
 - 「**性のルーレット**」にゆだねることは不道徳。
- 欧米の科学者の中には、神から与えられた創造性を積極的に生かすべきと考える者が少なくない。
 - 「神にかたどって創造された」(創世記**1:27**)

17

【肯定】フェミニストの視点から

- 人工授精によって、生殖の過程から男性を排除することができる。
- シュラムス・ファイアストーン
 - 性の不平等を生物学的理由(性的役割分業)から説明
 - 完全な体外生殖が男女の不平等を克服できると考えた。
- 安易な技術信奉は後に批判される。

18

【否定】宗教的視点から

- カトリック
 - 性の働きは、夫婦の愛の交わりと生殖という二重の目的を持っている。
 - 自然の性行為以外の生殖を基本的に否定する。
 - 自然法思想に基づく。
- プロテスタント
 - 責任倫理を重視する傾向がある。

19

Catholic condemnation of Nobel Prize stirs Italian press reaction

Rome (ENI). Vatican authorities have strongly criticized the awarding of the 2010 Nobel Prize for Medicine to Briton Robert Edwards, stating that the scientist's work on in-vitro fertilization does not help in the defense of life. At the same time, a number of editorials in the Italian press attacked the Roman Catholic position. Vatican Radio carried an interview with Lucio Romano, president of the Science and Life Association, on 4 October in which he said, "The award was for a technique which reduces humanity to a product. The assignation of the Nobel Prize to Edwards ignores all ethical issues linked with IVF." The president of the Vatican-based International Federation of Catholic Medical Associations, José María Simón Castellví, said, "Although IVF has brought happiness to the many couples who have conceived through this process, it has done so at an enormous cost. That cost is the undermining of the dignity of the human person." *Ecumenical News International*, 5 October 2010

20

【否定】フェミニストの視点から

- 「生殖と遺伝子の操作に抵抗するフェミニスト国際ネットワーク」(**FINRRAGE**)
 - 「女性のからだは、生命をつくり出すという固有の能力を持っているので、科学技術による人間生産のための原料として奪われ、切り裂かれている。このような科学技術の開発は、私たち女性にとっても、自然にとっても、世界の搾取されている人々にとっても、宣戦布告である。遺伝子工学と生殖工学は、からだに対する女性の**自己決定権**を奪うものである」(1985年)

21